

豊田一也氏 （株）藤高 特別技術顧問、初代タオルマイスター



豊田一也氏



今回の「タオルびと」は、2008年に初代タオルマイスターに任命された豊田一也氏である。現在は第一線を退いているが、（株）藤高の特別技術顧問をしながら、後進の指導にあたる。また、国家技能検定1級取得者で構成する「今治タオル技能士研究会」のメンバーでもあり、今治タオルの技術の継承や発展にも力を注ぐ。老舗タオルメーカーの藤高は、昔も今もオリジナルの製品を世に送り出すことで産地を牽引しているが、そのモノづくりを長い間支えてきたのが豊田氏である。藤高でタオルづくりに従事しておよそ60年。その歩みを振り返る。

とよだ・かずや ☆ 1943年2月、周桑郡楠河村（現・西条市楠）生まれ。楠河村立（現・西条市立）楠河小学校、三芳町立（現・西条市立）河北中学校をへて、1958年4月に今治公共職業補導所（現・愛媛県立愛媛中央産業技術専門校）に入学。1年間、タオル製造の基礎を学んだのち、1959年4月に（株）藤高に入社。藤高のクリエイティブなタオルづくりに携わり、同社の発展に寄与。長年の功績が称えられ、2008年に初代タオルマイスターに任命される。定年後も藤高の特別技術顧問として、また「今治タオル技能士研究会」のメンバーとして、後進の指導にあたる。

1. 幼少期

自然豊かな楠河村でのびのびと育つ

豊田一也氏は、1943年2月10日に^{しゅうそう}周桑郡^{くすかわ}楠河村（現・西条市楠）で父・^{ぬいのすけ}縫之助氏と母・よしこ氏との間に長男として誕生した。豊田氏は父親との思い出がない。なぜなら縫之助氏は長男の出生の前に徴兵されて入隊し、1944年にビルマ（現・ミャンマー）で戦死したからである。ただ、戦地に出征する直前に母親が生まれただばかりの豊田氏を連れて父親のいる高知県の駐屯所へ赴き、そのときに赤ん坊の豊田氏を抱っこしてくれたそうである。戦地から届く父親のハガキには、豊田氏のことをいつも書いてあった。その何枚ものハガキを豊田氏は成人してから読んだが、「父に関しては記憶がないためあまり考えたことはなかった」と言う。

父親を戦争で亡くしてからは、祖母と母親と豊田氏の3人暮らしだった。しかし、父親がいなくても、豊田少年は自然豊かな楠河村でのびのびとたくましく育った。1949年4月に楠河村立楠河小学校に入学し、毎日、近所の子供たちと山や川や海に行って楽しい日々を過ごした。楠河村は、周桑平野の西部に位置しており、山と海に囲まれた自然豊かな地域である。地名の由来にもあるように桑畑が広がり、水田もあり、山のもの海のものがかしこに豊富にあった。

家の近所には湧水の泉が数多くあり小川も流れ、豊田氏はこの泉や小川で釣りをしてよく遊んだ。底まで見える透明で澄んだ水だったので、魚が泳ぐ様子がよく見えた。「澄んだ水は魚釣りしにくいと言うけど、餌を自然に泳いでいるように見せると魚が警戒しないで寄ってくるんですよ」と豊田氏。アユやコイ、フナ、メダカ、ドジョウ、ウナギ、エビなどが豊富にいて、ミミズを餌に魚釣りするのが得意だった。特に、ウナギの捕獲は面白くて、川の石垣の穴に餌のミミズを針で刺した竹を入れて捕まえるたびに家に持ち帰り、母

親に喜ばれたものである。海では、潮が引くと遠浅の干潟が顔を出し、ハマグリやマテ貝、トリ貝に加え、いくらでも獲れたアサリは家に持ち帰って母親に調理をしてもらっていた。山に入ると、春にはつくしやわらび、竹の子、イタドリなどを、夏にはサクランボやびわ、グミ、桑の実などを、秋にはキノコを採って食べた。毎日、豊かな自然のなかで遊び、学び、飽きることはなかった。



興雲寺から見た周桑平野

また、河川敷で上級生が草野球を教えてくれるのも楽しみのひとつだった。当時はグローブやバットは手作りで立派なものではなかったが、暗くなるまで夢中で遊んだ。「勉強もせず、よく自然のなかで遊んだ」と話す豊田氏であるが、父親の代わりに楠河村の自然がたくさんのことを教えてくれたり、近所の仲間が寂しさを打ち消してくれたり、少年の頃の思い出は楽しい記憶でいっぱいである。

1955年4月、豊田氏は三芳町立（現・西条市立）河北中学校に入学した。中学生になっても、勉強よりは遊びに熱心だったが、唯一大変だったのが農作業の手伝いだった。農業を営んでいた豊田家では広い田畑を所有し、米や麦、野菜などをつくっていた。男手がなかったので、豊田氏が率先して田植えの準備から草刈り、稲刈り、脱穀に至る一連の農作業をこなした。特に苦勞したのは、稲刈りが終わった田圃の稲株を鍬で一つひとつ掘り返す作業であった。掘りつづけても終わりの見えない、かなり大変な役回りだった。それもあって、「大きくなったら絶対農業だけはしたくない」と考えた豊田氏は、中学校を卒業したら手に職をつけようと決めていた。

1958年4月、豊田氏は、今治公共職業補導所（現・愛媛県立愛媛中央産業技術専門校）織布科に入学した。同所は、1950年4月に今治公共職業補導所として設立され、木工科と織布科が置かれた。その後、1958年7月に職業訓練法施行にともない愛媛県繊維職業訓練所と改称され、さらに1962年4月に愛媛県今治職業訓練所に名称変更されたので、豊田氏が入所したときはちょうど最初の名称変更の直前であった。

当時は授業料なしでタオル製造に関する基礎を学べたため、新たな目標を模索していた豊田氏にとっては貴重な機会となった。そして、同じ中学校の同級生5人と一緒に伊予三芳駅から今治駅まで汽車で通学し、1年間タオル製造に関する基本的な知識を修得した。実際にタオルづくりの現場を見たのは入所後のことであり、豊田氏にとってさまざまな機械類やタオルづくりに欠かせない複雑な計算ですら、何もかもが新鮮に映った。とくに、初めて自作のデザイン

でタオルづくりをしたときは感動を覚えた。

補導所での学習が終わるとすぐさま車で伊予三芳駅に戻り、夜間から楠河地区にあった愛媛県立丹原高等学校定時制課程の河北分校に通った。昼間は働いて夜間は学校で勉強するという同じ環境にいた友人と会えることはとても嬉しかった。また、補導所と高校で学ぶ内容がまるで違っていたため、新鮮味もあって毎日充実した日々を送った。

補導所で世話になった恩師（当時は助手として勤務）とは帰り道が同じでよく話をした。恩師から、親友で藤高にすでに入社していた谷岡^{らみよし}史祥氏が職場ですごく頑張っていることを聞いており、藤高の名前は親友をとおして豊田氏の記憶のなかにあった。さらに、恩師からは、「会社に入れば3年で一人前になる努力をなさい」とのアドバイスをもらっていた。このアドバイスは、藤高入社後の豊田氏のスローガンとなる。なぜなら、藤高に入社した直後に豊田氏は補導所で学んだ内容と実際のタオルづくりの現場での作業内容とのギャップに悩まされ、忍耐を強いられた時期があったからである。これについては次号で触れる。しかしながら、どのタオルメーカーに入社してもこのギャップは不可避である。つまり、補導所では1年間の限られた短い時間にタオルづくりのすべての工程を頭に叩き込まなければならず、ほぼすべての工程を自らがこなうが、タオル工場では分業を基本としてモノづくりがおこなわれているため、入社直後の下積みの時期においてはなおさら分業の一端を担うだけであった。

学校の敷地内には愛媛県染織試験場（現・愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）があり、タオルづくりを学ぶにはいい環境だった。空いた時間は、補導所の友だちや試験場の技術者も一緒にソフトボールやバトミントン、卓球などをして交流を深めた。豊田氏は、当時はその技術者の一人として認識していなかったが、1985年から1991年にかけて染織試験場の場長を務めた芥川記氏（「タオルびと」2015年8月号～2015年11月号を参照）とは近所付

き合いのなかで交流を持ち、また四国タオル工業組合時代に仕事でも共同事業をおこなった縁がある。（次号につづく）

